学 術 調 査 報 告 書

２００８年7月６日

（フリガナ） 申請者名	スチンゴワ	入学年度	２００５年度
		学年	3

研究題目	モンゴル民族教育における教科書編纂の実態
主任指導教員	倉石　一郎

(1) 学術調査の目的

本調査研究は、中国におけるモンゴル民族の教育・日常生活・アイデンティティ形成に関する博士論文のための研究の一環となるものである。

中国は漢民族を中心とする統一された多民族国家であり、漢民族以外の民族を少数民族と称する。これまで公認された少数民族は 55 を数え、その総人口は 1 億であり、全国人口の 8.4%を占めている。全人口に占める比率で見れば「少数」ではあるが、量的に見れば決して「少数」ではない。

中国の憲法は「序言」のなかで、中国は漢族と五十五の少数民族から構成された「統一された多民族国家」であると定めており、さらに第四条では各民族の一律平等、民族区域自治の実行や各民族言語や文字の使用と発展の自由などを定めている。

中国における少数民族の中には、約 600 万人のモンゴル人も含まれており、モンゴル民族の教育は中国少数民族教育の代表的な価値を有するといわれている。その最も重要な要因として、モンゴル民族がかつて広大な土地を支配した歴史的な経緯から、現在も十以上の自治区、省に渡り幅広く居住していることや、二言語教育の歴史が長く、中国民族教育の雛型を形成したこと、及び最も早く成立した自治区であること（1947 年 5 月 1 日に内モンゴル自治政府として成立し、その後 1949 年に内モンゴル自治区と改称）が挙げられる。

中国におけるモンゴル民族教育に関する研究は近年増えつつある。しかし、その多くは「理論的」、「理念的」な言説で、実際に民族学校の現状やその民族学校のカリキュラム・教育内容に関する実証的研究はほとんど見当たらないのが現実である。限られた先行研究のなかで重要なものとしては、岡本雅享の『中国の少数民族教育と言語政策』（1999、社会

評論社）を挙げることができる。同著書は、中国の少数民族の言語・教育をめぐる状況を、19 世紀末頃から 1990 年代までの時代にかけて、民族ごと或いは地域ごとに捉え、民族語による教育や漢語との二言語教育の実施に焦点を当て注意深く検証を行っている。

私は修士論文「現代中国における少数民族教育に関する実証的研究」のなかで、内モンゴルにおけるモンゴル民族学校での実態調査をもとに、民族学校に在籍する生徒の学校選択の経緯やその動機付け、進路意識等について検討し、それらに影響を及ぼす文化的、社会的要因を探った。博士課程においては、中国少数民族学校での教育内容について研究を進めるため、これまでモンゴル民族学校で使用される教科書を中心にその記述内容の特徴について考察を行った。こうした研究の結果、モンゴル人に対する教育内容には民族的・文化的な内容もある程度含まれているが、それはあくまで中国の国民教育と矛盾しない範囲に限られていることが明らかになった。

研究をさらに進めるためには、こうした教科書が実際にどのようなプロセスで編纂されてきているのか詳しく検討する必要がある。本調査の目的は、実際に民族学校で用いられる教科書がどう編纂され、どのような審査を経て採択されているのか、教科書に組み込まれる記述内容は誰によって、どのようなプロセスで選定されているのか、そこに教科書の編纂に携わる者及び審査に携わる者のどのような思惑が入り組んでいるのかを明らかにすることである。

(2) 調査実施地および期間

本調査では、①教育課程編成プロセス、②教科書編纂過程、③教科書審査検定等に着目し、いかなるプロセスを踏まえて、モンゴル民族学校の教育内容が選定されているのかについて文字資料及び事例分析（現地調査含む）を通じて、教科書編纂現場の実情に即した検討を行うことを計画した。具体的には、まず教材内容の選定基準および教科書編纂方針に関する文字資料を検討した上で、内モンゴル教育出版社にてモンゴル民族学校のための教科書編纂や教材審査に携わる方々へのインタビュー調査を行い、教科書編纂・審査の実態について分析・考察するという計画を立てた。

上記の計画に基づいて、現地調査を行うために、2007 年 12 月 18 日～2008 年 1 月 2 にかけて、内モンゴル自治区フフホトへ出向き、モンゴル民族学校のための教科書編纂・出版を行っている内モンゴル教育出版社にて文献収集及びインタビュー調査を行った。

(3) 学術調査の具体的な実施内容

中国の教育カリキュラムは「教学計画」と「教学大綱」と「教材(教科書)」からなっている。「教学計画」は教学活動を指導・規定する書類であり、主に教育課程の設置とその順序や時間配分などを規定している。「教学大綱」は各教科の教学内容を規定する書類であり、主にその教科の目的と各章・節の知識範囲及び実習や実験や宿題などの割当時間を規定している。「教材」は「教学計画」と「教学大綱」に基づき、授業のために編集されたものであり、主に「教科書」を指している。少数民族学校の「教学計画」は民族語科目をのぞけば漢民族学校とほぼ同様であり、大学受験のために中国統一テストの対策を取っている。なかでも、特に漢語(中国語)の能力が重視されており、従来小学校三年生から教えていた漢語(中国語)は、現在、一年生から教え始めているところが多い。なお、近年英語教育も注目を集めている。また、各教科の教育内容も漢民族学校をモデルとしている。算数・物理などはもちろんだが、民族の特徴をもつはずの歴史教科書すら、漢語からの直訳である。

中国は、成立後の 50 数年の間に、学校教育における「教学大綱」を８回、教科書を９回改訂している。ただし、それは全て 1950 年に誕生した人民教育出版社によって行われた。教科書の研究・編纂の専門機関として作られた人民教育出版社が、小中高の「教学大綱」の作成とその教科書及び参考書の編集、出版と発行を一手に引き受けて行なっていたのである。改革開放の下で、1980 年代後半から学校用教科書は「一編一本制」が見直され、様々な出版社が教科書を自由に執筆し、審査に合格したものを教科書として認めるという「審査制度」が実施されるようになった。これと同時に漢語以外の文字で書かれた少数民族の教科書の検定活動も展開され始めた。

この改革によって、全国で多様な教科書を編集・発行することが許可され、教科書の「編集」と「審査」が分離した。編纂主体が多くの出版社に開かれたものになるに伴い、教科書の審査を行う機関が新設され、教科書の検定を行うようになった。

一方、少数民族に関しては、国家教育委員会と国家民族事務委員会が 1992 年に配布した「少数民族の教育を強化することに関するいくつかの意見」において、「民族自治機関では少数民族の文字による教材の編集、出版および検定を強化すべきである」と書かれている。

こうした教科書は全国統一の「教学大綱」に基づいて編纂される。各科目の教学大綱とも数十ページに及ぶ内容なので、ここで個々に紹介する紙幅の余裕はないが、しかし、共

通して言えることは、教授・学習の中心である教科書の効率的な活用が目指され、教科書を生徒に十分理解させるための努力がなされていることである。例えば、教科書の位置付けや役割についての説明が、その表れであろう。教科書の「はしがき」には必ずと言っていいほど当該教科の狙い、性格、内容（構成）が説明され、何をどのようにして、なぜ学ぶのかが明示されている。また、どの科目も教科の狙いの部分で、社会主義的な世界観を持った人間の育成について触れている点では一致している。それに対し、少数民族固有の文化や価値などについて触れている教科書は、民族固有科目としての少数民族語の教科書を除けばほとんどない。そして、たとえ自然科学関係の科目であっても、「祖国の偉大な科学者」を積極的に取り上げているのが特徴である。歴史教科書の例を挙げてみると、「序言」の説明部分で必ず「義務教育段階における歴史は生徒の理解できる範囲で社会発展の歴史の合法則性を科学的に教え、資本主義の消滅、共産主義の勝利の必然性についての信念を生徒のなかに育て、歴史の真の創造者、物的・精神的価値の創造者としての人民大衆の役割および歴史における個人の意義を明らかにすることを助けるものでなければならない」と述べられており、社会主義の勝利を歴史の必然性としてとらえ、その役割を担う人民大衆を前面に出すことにより、いわゆる弁証法的唯物史観が貫かれている。

1985 年 1 月に教育部（1986 年 6 月からは教育委員会に改称）は「全国小中学校教材検定委員会工作条例（試案）」を公布し、更に 1986 年には「中華人民共和国義務教育法」を公布した。この義務教育基本法では、「…義務教育の実施に当たって、地方が義務教育全般に対して主な責任をとる…」と規定していたため、当然、義務教育段階の教科書の編纂・検定に関しても、地方が責任を負うことになった。そこで、1987 年 10 月に「全国小中学校教材検定委員会規約」と「小中学校教材検定基準」及び「小中学校教材の検定方法」が一斉に公布された。そして、「全国小中学校教材検定委員会規約」によると、地方で使用する教材（郷土教材、選択教材、補助教材）の検定は、省、自治区、直轄市の教育行政機関が実施できるようになった。

上記規定により、モンゴル民族学校における教科書の検定も、一部ではあるが 1973 年に誕生した「八省・市モンゴル語教材協議小組」で実施し、1986 年に成立した「全国モンゴル語教材審査委員会」が審査した後、「内蒙古教育出版社」において、編纂、出版されるようになっている。しかし、モンゴル民族学校では、民族独自の教育内容が含まれている一部科目の教科書を除いて、原則として漢民族学校で使われている教科書の翻訳版を使用し

ている。その上、独自編纂教材であっても、その内容がすべてモンゴル民族に関するものであるというわけではない。

では、モンゴル民族学校のために独自編纂されている教科書は、どのような基準や目的・方針に沿って編纂・審査されているのかだろうか。また、実際の編纂・審査の作業は誰がどのように行っているのだろうか。

すでに述べたように、中国において教科書は全国統一の「教学大綱」の規定に基づいて編纂されるが、内モンゴルにおけるモンゴル民族学校で使われる教科書は直接この全国統一の「教学大綱」に基づいて編纂される訳ではない。内モンゴル教育庁の「九年義務教育用モンゴル語教学大綱」検定グループが全国統一の「教学大綱」をもとにしつつ内モンゴル・モンゴル民族の実情に合わせて執筆した「九年義務教育用モンゴル語教学大綱」に基づいて編纂されているのである。

「九年義務教育用モンゴル語教学大綱」検定グループは、教科の特徴、教科の位置づけ及びその役割を検討した上で、モンゴル語の教育目的及び教科書の編纂方針、教学計画について定めている。その目的、方針とは次のようなものである。

まず小学校のモンゴル語の教育目的および教科書の編纂方針は次の通りである。

「小学校のモンゴル語教育は子どもの全面的な発展を目的とし、生涯にわたる学習生活と労働作業の基礎となる。

小学校のモンゴル語教育は、民族の言語文字および伝統習慣を愛する心情を養い、民族の言語と文字を充分に理解し、応用できる言語能力を身に付けられるように指導する。また子どもたちに初歩の聞く・話す・読む・書く能力を身につけさせ、モンゴル語を学ぶ良好な習慣を育てる。

指導の過程では、子どもに対して国家・民族への愛情、社会主義の思想と道徳、科学的な思考方法を培い、子どもの創造力、高尚な審美観を陶冶し、健康な個性を高め、良好な意志と性格を形成する」

小学校モンゴル語教科書の編纂方針については、1～ 2 学年を低学年、3～ 4 学年を中学年、5～ 6 学年を高学年と分けて、それぞれ学年の学習目標を定めている。その学習目標は以下の通りである。

「低学年の授業では、モンゴル民族の特性に注目して、モンゴルの子どもたちの生活に密接した言葉や挿絵を添え、子どもたちの既存の知識と関心のある内容を十分に考慮し、

母語の優れた特徴を傑出させる必要がある。教材の種類としては、子どもの伝説、寓話、ホルボー、詩、歌などを中心とする。

中学年・高学年の教材としては優れた主題、文体、風格を有する多様な文章や、内容面でモンゴル民族の歴史文化、習慣、生活環境を反映した文章を中心とし、科学の普及に関する文章をある程度取り入れる必要がある。」

中学校のモンゴル語の教育目的および教科書の編纂方針は次の通りである。

「小学校のモンゴル語教育の基礎の上に、子どもたちの民族の言語と文字を正しく理解し応用する力をさらに育成し、聞く・話す・読む・書く能力を高め、言葉の感受性を育て、思考を発展させ、モンゴル語を学ぼうとする習慣を養う。

指導の過程では、愛国の精神、社会主義の思想と道徳を育てると同時に、母語や歴史文化への愛情を育み、知識の視野を広げ、創造の精神を養うように努め、文化的な品位を高め、健康な個性、高尚な審美観、高い品格を有する人物を育てあげる。」

ここでは、小学校の学習を踏まえた上で、聞く・話す・読む・書く能力をさらに高め、教育の過程では社会主義の思想・道徳を育成し、モンゴル語やモンゴル民族の文化に興味関心を高めることを中学校のモンゴル語の教育目的と示している。

中学校の教科書編纂方針の一部分を抜粋してみると

「(教科書)1 冊ごとに母語で書かれた文章が約 75%、翻訳した文章が約 25%とする。古文は 1 冊ごとに 1 課を配当し、第 1 巻・第 2 巻には口承文芸を取り入れる。(中略)精選した教材としては、モンゴル民族の歴史文化、生活環境を反映した文章を中心とする。モンゴル人の子どもの思考と学齢に合わせて授業に配慮を加えて教育目的を達成する必要があり、可能な限り学習の発展を進め、知識の範囲を広げ、学習意欲を高揚させる必要がある」と記述されている。

以上のように、小中学校の『モンゴル語教学大綱』では、言語能力だけではなく、モンゴル民族の歴史や文化への興味関心を高め、その大切さを子どもたちに教授することもモンゴル語教科書の目標として挙げられている。そして、もう一方では社会主義の思想・道徳や愛国主義精神を育てることも重要な目標としてあげられている。すなわち、言語教育と思想政治教育は統一的なものであり、お互いに補い合うものである。言語教育においても思想政治教育が重視されるのは当然だが、その思想政治教育はモンゴル語教育の特質に基づき、その教育の過程において暗黙裡に自然に浸透させるといったように行われるべき

であるというのが、中国・内モンゴル自治区の基本方針である。

では、上記のような目的、方針に基づいて教科書はどの様なプロセスで編纂されているのか検討してみよう。

すでに述べたように、内モンゴルのモンゴル民族学校で使用される教科書は内モンゴル教育出版社において編纂、出版されている。内モンゴル教育出版社は 1960 年に小中学校教材出版を担う機関として発足され、1966 年に文化大革命が始まると一旦解散されたが、1969 年に再開され､現在では内モンゴルにおける教科書の編纂と出版の中心となっている。モンゴル民族学校における「モンゴル語」教科書の編纂は当該出版社が担っている。

内モンゴル教育出版社における「モンゴル語」教科書編纂委員会は委員長及び編集長を含む約 15 人からなっており、学年毎に 2 巻の教科書を編纂する。そして、巻ごとに、担当編集者１人と編集委員数名が定められている。教科書編纂歴 27 年で現在編集長を務めるＨＢ氏によれば、以下のような順序で教科書編纂に取り組んでいる。

我々は、まず「教学大綱」に基づいて、教科書編纂グループによる議論を経た上で、教科書編纂計画を立てる。この計画では、選定する文章が中国の政治に反さない内容のものである必要が強調される。それから、言語教育や文学としての位置づけが強調される。さらに、モンゴル民族文化、歴史に関する知識を伝達する役割を果たすべきであることが強調される。

次に、この編纂計画に基づいて担当編集者が中心となりそれぞれ担当する教科書を編纂する。編集の際には極力個人の感情を入れ込まないように「教学大綱」及び編纂計画を随時確認し、また教育現場の状況を把握するために、現場の教師と連絡、相談をしながら編集をしている。

氏は具体的な教科書編纂基準についてこのように語る。

「教学大綱」では、小中学校の段階ごとにその教育目的、教科書編纂方針が定められているが、私たちはそれに基づいて編纂計画を決めている。そこでは、学年ごとに幾つの単元に分けて幾つの文章を使うか、単元ごとにどのような内容のものを選ぶのかを決める。その中で一番重要なのは、内容選定、つまりどのような作品を選ぶのかという問

題である。従来の教科書編纂、1960 年代初頭特に文化大革命期から 80 年代初頭までのものは政治の制約を非常に大きく受けていた。現在、特に 1998 年以降は政治的制約から完全に離れたといえる。政治的な制約から離れることは、80 年代には提案されていたが、なかなか実現されず、90 年代以降になってから徐々に変わってきた。「モンゴル語」がひとつの独立した学問として位置づけられるようになってきたのである。

この点について、1960 年～1986 年まで「モンゴル語」の編纂に携わり、現在は審査委員会に勤めるＥ氏は当時の状況を振り返って以下のように語る。

昔は教科書を編纂するときに政治的な要素によく振り回されたものだ。特に文革が始まってから、出版社自体が解散された。そして、教科書編纂といえば「最高指示」や「毛沢東語録」といったものの翻訳だった。今は内容的にも、質的にも本当によくなっている。

そして、教科書内容の選定基準について、ＨＢ氏は次のように言う。

先に述べたように、今の教科書は政治的な制約から離れていて、中学・高校の段階では、選んだものの 75%～80%がモンゴル語で書かれた文章である。そのほかに漢語やロシア語、英語、フランス語など他民族のものの訳文もあるが、そこには母語で書かれたものを通して自民族の言語文化を学ぶだけではなく、他民族語で書かれたものを通して、他民族の文化を理解させるという目的がある。

もちろん、教科書に取り入れる文章を選定するときに、まずはその文章が優れているかどうかを考える。子どもたちに母語による文学的な陶冶をすることが重要だからだ。しかし、きれいな文章であれば良いというわけではない。その中で必ず子どもに何かメッセージや知識を伝えられるものを選ぶ。次に、文章の内容、思想に注意しなければならない。たとえば、「愛」の教育で言えば、党・政府に対する愛、祖国に対する愛、故郷に対する愛、民族に対する愛、家族に対する愛など「大きな愛」を反映するものを選ぶ。それから、文章技法も作品を選定するひとつの基準となる。子どもたちに母語で文章を書く技法を与えるというのも「モンゴル語」教科のひとつの目的となるからである。

また、2001 年から教科書編纂に携わってきた若手編集者は、こう語る。

はっきりと言ってはいけないだろうが、まったく政治的な制約を受けないということは、ありえない。それは、政治的な主導権を我々モンゴル人が握っているわけではない為である。どの民族が政治的な主導権を握っても同じことになるだろう。我々が主導権を握ることになっても、他民族を同化しようとするだろう。2000 年以降に政治的な制約が非常にゆるくなったことは確かである。また、我々は編集の際に政府・国家の意志に反しない限り、自民族の文化・歴史の伝達に最大限の配慮をしている。たとえば、「教学大綱」の社会主義的思想道徳の育成という目的に沿って作品を選定する際に、モンゴル国の作品を選ぶことによって、モンゴル人の生活文化も反映できるように努めている。

上記のような編纂計画、教科内容選定基準に基づき、担当編集者が文章を選定し教科書を編集して、編集長による審査・改訂を経て、編纂委員長に渡される。さらに委員長の審査を通れば、全国モンゴル語教材審査委員会に提出される。そこで審査委員会の議論、審査を経て初めて出版可能となるのである。

「全国モンゴル語教材審査委員会」は 1986 年に成立され、4 年を一期とし、現在は六期目になっている。委員長 1 名（内モンゴル教育庁副庁長）と副委員長 2 名及び委員 12 人からなっている。だが、実際の教科書の審査はこのメンバーだけで行うわけではない。モンゴル民族学校のある各省・盟より教科教育知識に富んだ代表が派遣され、審査委員会のメンバーと共に実際の審査を行うのである。

そこでは、「教学大綱」に基づいて教科書審査基準が定められている。その基準について、2004 年から教材審査に携わっている大学教授のＢ氏は次のように語る。

我々が審査する教材は、教科書、読本、参考書、練習問題集の四つの部分からなっている。審査の基準となるのは、まず、選択された内容が、憲法や法律規定に反していないか、教育関連法規に矛盾しないか、国家政策に沿っているか、といったような点である。この政治的な基準は最も重要である。次に、選択された内容が子どもたちの発達段

階に合っているか、鄧小平が提議した「三つの志向」（未来志向、現代化志向、世界志向）に合致しているかという点を見る。そして、民族の文化、歴史の内容が適当な割合を占めているのか、またその伝達の役割を果たせているのかについて考える。さらに、生徒の生涯学習に寄与できる妥当な教科知識を与えられるものであるか、現在の社会環境にあっているかについて検討する。

教科書審査者は、上記のような基準に沿って教育出版社より提出された教科書を査読し、各自コメントをつけて、審査会に臨む。そこで、議論や意見交換を経て、審査検定書を作成し、内モンゴル教育庁に提出する。内モンゴル教育庁は審査検定書の結果を内モンゴル教育出版社に渡し、実際に教科書が印刷・出版にかかるのである。

しかし、以上のような教科書の編纂・審査のプロセスにおいて多くの問題が存在することが分かった。

Ｂ氏は、現行の教科書の編纂・審査のプロセスにおける問題点について、次のように語る。

教科書の審査に与えられている時間があまりにも短すぎる。教科書を渡されて、わずか数日間で査読してコメントをつけるということは非常に厳しい。はっきり言って、誤字脱字や単語解釈の誤りなどの初歩的なミスの訂正で終わってしまう場合がある。また、編集者と審査者の間の連携、協力がまったく取れない状態にあるのが現状である。

この点について、編集者のＨＢ氏もこのように語っている。

教科書は我々編集者と行政、審査者の手を渡って、生徒の手に渡り、現場の教員によって子どもたちへ伝達、教授されるものであるが、この各機関がそれぞれ独立しており、お互いの連携が取れていないがために、伝えたい内容がうまく伝わらないこともよくある。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

以上のように、本調査では中国における民族教育のあり方を、モンゴル語教科書の編纂

プロセスに焦点を絞って検討した。中国モンゴル民族学校の教科書の編纂は部分的に自治区域内の教育行政機関において実施されるようになったものの、その基準である「教学大綱」の修正・審査権があくまでも中央レベルに属していることは明らかである。これは、中国の少数民族地域における民族自治が、不可分の統一国家、党の指導という強い枠のもとでの地方自治であることに起因する。つまり、漢族に対する教育と少数民族に対する教育が「異なる」民族教育と言ってもそれはあくまで中国の国民教育の一部であり、国民教育の目的は個々人ではなく国家の需要を最大の特徴としているからに他ならない。

民族教育とはいっても漢族とは異なる少数民族に対する教育の場合、特に中華民族の形成という課題が強調されている。これは、本稿で述べてきたモンゴル民族学校における「モンゴル語」教科書の編纂目的･方針及び内容の特徴からも十分に窺い知ることができる。「モンゴル民族の言語や文字を理解して応用する学生の能力を高め、知能を発展させると同時に生徒に社会主義思想と愛国主義精神を育てること」が、モンゴル語教科書を編纂するにあたっての目的の一つになっていることからも、少数民族生徒に対する国家意識の涵養が重視されているのは明らかであり、それが少数民族意識の育成のみを突出させにくい一因となっていると思われる。

ただし、実際の教科書編纂に当たっては、国家の意志に反しないことが強調され、「社会主義思想と愛国主義精神を育てる」ことが重視されながらも、目的に沿った作品を選択する際に、若手編集者のH氏が語るように、民族の文化・歴史の継承、民族を愛する心を育てることに寄与できるような多面的なものを選ぶよう努めていることも確かである。

(5) 調査地・文書館建物などの写真データ

中国では午前２コマ目の授業の後にラジオ体操の時間となる。

2000 以降に建て直された新しい校舎（赤峰市乌丹モンゴル中学校）

教室の一角と生徒たちが自主的に作っている壁新聞

新しく建てた内モンゴル教育出版社の建物